
とりあえず、異世界でバトルロワイヤルします

mike

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりあえず、異世界でバトルロワイヤルします

【Nコード】

N8149Z

【作者名】

m i k e

【あらすじ】

とりあえず、異世界転生することになった主人公が、転生する前に世界観の設定資料集を読み漁り、戦略を立てた上で異世界転生します。

初期戦略は上手くいくはずですが、その後はどうなることやら。

とりあえず、バトルロワイヤルの勝利を目指します。

『スライムベイベー』からはじめる異世界ロワイヤル(前書き)

とりあえず、1日1話更新を目指しています。
よろしくお願ひします。

『スライムベイビー』からはじめる異世界ロワイヤル

『エネルギーガ・TRPG ルールブック』

そう書かれた厚手の本を俺は目の前のニコニコ微笑む天使から渡された。

どうやら俺は、現実の世界で死亡し、転生するらしい。

その転生する先が、剣と魔法と魔物と精霊の世界『エネルギー』らしい。

……とりあえず、熟読することにする。

3時間ぐらいかけて、俺は『エネルギーガ・TRPG ルールブック』を読み終えた。

この『エネルギーガ』を簡単に説明するなら、転生者達によるエネルギーに住む人々を大いに巻き込んだデス・ゲームということになる。

転生者たちは互いに殺し合い、最後の一人になるまで殺しあつて欲しいとのこと、優勝者には転生する世界『エネルギー』が与えられるとのこと、ちなみに転生者の参加人数は100人である。

正直、世界を貰ったところでどうしたらいいのやら、なにをしると。

まあとりあえず、異世界での生活は楽しみたいな。

酒に食べ物、女に戦。

前世で出来なかつたいろいろなことを楽しみたい。

あと、殺し合いになる転生者たちにはゴッドポイント、通称GPが300P与えられ、そこから能力やら才能やら種族値やらにポイントを振り、その能力を受け転生し殺しあうらしい。

さらに詳しい資料や設定もあるらしいので、それが記載されている設定資料集も借りて熟読する。

更に5時間が経過する。

さらに、俺は天使から紙とペンを借りて、設定資料集から学んだ事をまとめ、戦略を練り、構想を重ねる。

更に10時間が経過する。

その構想を元に天使とGPの振り分けについて相談する。
相談した結果、天使の上司までこちらに呼び、話し合い、俺のGPの振り分けが決まった。

相談時間でプラス22時間が経過した。

俺は転生部屋で合計40時間過ごし、剣と魔法と殺し合いの世界『エネルギー』に転生した。

この世界で最も弱いモンスター『スライムベイビー』として。

俺がスライムに転生したのには理由がある。

それは、スライムに転生すると使えるGPが増えるからである。

GPのマイナス振りというものがる。

つまりステータスをマイナスに振ることにより、GPを増やすという方法である。

基本的な使い方は、魔法使い特化型のステータスの振りにしたい時に、筋力などのステータスを犠牲にして、魔力や知力を増やす時などに使う方法のだが、俺は種族の振りを究極までにマイナスに振った。

その結果が『スライムベイビー』である。

数いるスライムの中で最も弱い固体で全長も10cmしかない。そして、俺は+1,000,000GPを得ることに成功した。

次にGPを振ったのが生まれる場所である。

俺は『エネルギー』で最も巨大な『ダンジョン』がある町『エルデン』の地下100kmの地点に六畳一間の部屋を作ってもらい、そこに『マナプール』設置してもらった。

この『マナプール』付き六畳一間への転生に500,110GPを使用した。

ちなみに、500,000GPは『マナプール』の作成に使い。

100GPは六畳一間の作成に、10GPはその部屋に生まれる事に使用されている。

『マナプール』とは、魔力の泉のようなもので、『エネルギー』でも

重要な拠点にしか存在しない珍しいものである。

そして、この『マナ』というものは魔物にとっては『経験値』と同じ効果を持っており、『マナ』を摂取することにより魔物は格を上げ、より強い魔物へ進化することが出来る。

その部屋に俺は『スライムベイビー』として転生した。

そして15年の月日が流れ、俺は『アルティメットスライム・インフィニティゴッド』に進化していた。

名前が長い。

無駄に強そうな単語が付け足されている。

そして、俺は虹色のオーラを纏い黄金に輝いていた。

趣味悪。

まあいいや、ちなみに15年でここまで進化できたのはGPを使い習得した『成長率100倍』と『マナ吸収率100倍』と『マナ蓄積増加率100倍』のお陰である。

ちなみに3つとも10,000GP掛かっている。

というか、スライムはここまで進化してようやく人格が芽生えるのだ。

今までは考えることも出来ず、『マナ』を摂取するだけのニートスライムだったが、これで漸く、バトルロワイヤルに参加できる。

俺はスライムの特性である『分裂』を使い体を裂いて、スライムを作成する。

この本体である『アルティメットスライム・インフィニティゴッド』から『分裂』で生まれたスライムは俺と意思を共有しており、

俺の意思をコピーした固体を作ることが出来る。

『アルティメットスライム』

特性『究極変質』アルティメルトを持ち、下位のスライム全てに変化できる能力を持つスライムの上位種である。

分かれた俺はすぐさま『究極変質』アルティメルトを発動する。

『マッドスライム・ダイバー』

特性『潜地』アースダイブを持ち、地中を最高時速50kmで進むことが出来るレアスライムである。

『マッドスライム・ダイバー』な俺は地上へ向かって最高時速で進んで行った。

2時間ほど進んで地表に出るとそこは牢獄だった。

俺はまた直ぐに『究極変質』アルティメルトを発動する。

『シャドースライム・ダイバー』

特性『潜影』シャドードライブを持つ、隠密に優れたスライムである。

俺は特性を発動し影に沈む。

牢屋は空で人の気配は無い、俺は気配を探りながら周囲を探索する。

俺のいた部屋に人は居なかったが、隣の部屋の牢獄には鎖に繋がれた人間が居た。

首輪もしており見た感じは奴隷である。

更に探索を続け、上へ登る階段を発見する。

上に登って探索を続けるとそこは大きな豪邸であることがわかった。

奴隷商人の家なんだろう。

執務室では豚の様に肥え太った男が金貨を嬉しそうに数えている。

更に探索を続けると風呂場で男と女が交わっていた。

男に後ろから突かれ声を荒げる女と黒髪の男。

俺は直ぐに直感した。

この男、『転生者』だ。

俺達『転生者』同士のバトルロワイヤルはまず、敵である『転生者』を発見しなければならない。

だが、その発見方法は基本的に目視だけである。

『転生者』を『転生者』が見る事により、相手のことを直感的に『転生者』だと見抜けるのだ。

さて、俺はまだ影の中で気付かれていない。

相手は交尾の真っ最中でこっちには見向きもしない。

チャンス到来。

俺は男の後ろに回りこみ、影から出現し、『究極変質』アルティメルトを発動する。

『ホワイトスライム・スリッピー』

特性『睡眠ガス』を持つスライムで直ぐに特性を発動する。

ガスを吸った男女はそのまま眠り崩れ落ちる。

簡単にバッドステータスに陥るとは、こいつ雑魚だな。

さらに、『究極変質』アルティメルトを発動する。

『ブラッドスライム・パラサイト』

特性『寄生』パラサイトを持つスライムで人や魔物の意思を乗っ取り操ることが出来るスライムだ。

それでは失礼しますよ。

俺は口からその男の中に侵入し、脳を侵略し、身体を掌握した。

頭の中で声が響く。

《『転生者』が1名脱落しました。

残り『転生者』は73名です》

どうやら、俺が進化するまで15年間で既に27名の『転生者』が脱落してるようだ。

結構な数が残っているようで何より。

俺は今後の展開に期待しながら、人間の身体で立ち上がった。

奴隷商人の本体は『ブラッドスライム』

俺が身体を奪った『転生者』の名前は『ウオルフ・ゲッペルト』

『エルデン』で多くの奴隷の販売を手がける大商人の『ゼオルフ・ゲッペルト』の一人息子であり、ゼオルフを大商人にまで登らせた影の支配者であった。

それはウオルフのGPを使い習得した固有魔法『魂縛魔法』ソウル・コントラクトのおかげである。

この『魂縛魔法』ソウル・コントラクト簡単に説明するなら、魂を拘束し奴隷を作る魔法である。

この世界の奴隷といえば、普通に金で買えるもので普通の鎖で繋がれて販売されている。

しかし、意思や魂は拘束されておらず、逃げようと思えば逃げられるし、逆らおうと思えば逆らえる。

だから、奴隷はもっぱら暴力や身内を人質にとられ従わされている。

しかし、『魂縛魔法』ソウル・コントラクトをかけられた奴隷は違う。

魂を拘束された奴隷は主人に絶対服従だ。

命令されれば従うし、魂に刻まれた命令にはどうしようとも抗えない。

だから、ウオルフは『魂縛魔法』ソウル・コントラクトをかけた奴隷を販売した。

これが大ヒットし、貴族に上級冒険者、果ては王族までも奴隷を買いに、又は『魂縛魔法』ソウル・コントラクトをかけてもらいに奴隷を引き連れてやってきた。

奴隷を作る方法もそんなに難しくはない。

奴隷の命を握っている状態。

奴隷の絶対優位に居る状態で、『我に従え、我はお前の魂を縛るもの』と唱えて、頭に触るだけで『魂縛魔法』ソウル・コントロールを掛けられる。

後は『命令』で主人を指定してやれば、『魂縛奴隷』の出来上がりである。

あと、作れる奴隷の種類もある程度決めることができ、主人に対して愛情を抱く『愛奴隷』、主人に仁義を尽す『仁奴隷』、主人に異常なほどの性欲を湧き立てる『性奴隷』など、洗脳効果を与えることも出来る。

なんとも使い勝手のいい魔法である。

ちなみに、ウォルフの知識や経験は俺のGPを使い習得した『精神読取』インクメンタリーによつて読み取った結果である。

これの習得には5,000GP掛かりました。

あと死体から能力を奪い取ることの出来るスライム『カオススライム・マイター』スキルイーターの特性『能力搾取』によりウォルフから『魂縛魔法』ソウル・コントロールを奪い、スライムである俺が使えるようにしてある。

さて現在、俺ことウォルフは自宅で休養中である。

それは俺の体内で大規模な肉体改造が行なわれている為である。

『ブラッドスライム・キマイラ』

特性『バラシム侵食』により肉体をより強靱でスライムにとって最適な体に作り変えているのである。

それも今日で終わりである。

さて、そろそろ第2ステップに移ろう、本体の準備もそろそろ終

わるし。

俺は『分裂』を発動し『スライム』を作成し父親に渡す。

こんどから俺の変わりにこいつが『ソウル・コントラクト魂縛魔法』を使えるから、親父の好きなように使って、好きに『魂縛奴隷』を作ってくれ。

俺はちよいとやる事あるから奴隷作りに時間を裂けない。

そいつ、弱いスライムだから大切に育ててくれよ。

とって、スライムの使い方と飼い方のメモを渡して俺は自室に向かった。

この奴隷商売は大切な人脈源と情報源になる。

終わらせる訳にはいかないし、俺自身も時間を裂けない。

強引ではあるが、親父にもメリットはあるし大丈夫だろう。

自室で直ぐに外行き、ダンジョン行きの装備に整える。

軽鎧を着て、小手に脛当、鉄板の仕込まれた丈夫な靴を履き、腰に剣を吊るす。

ウォルフは頻繁に奴隷市場に出向いていたのだろう、奴が所持している奴隷はかなり優秀なのが多かった。

まあそれも既に俺のものなのだが。

俺は護衛兼『愛奴隷』の3名を呼ぶ。

1人目は長い赤髪を後ろで束ねた緋色の瞳を持つプロポーションの優れた女性。

ガーディアンナイト『守護騎士』の職業を持つレベル426の『テレサ』

2人目は黒髪をセミロングで揃え、青色の瞳を持つネコ耳が特徴的な美少女。

『侍^{サムライ}』の職業を持つレベル394レベルの『巴』

3人目は金髪碧瞳の長い耳を持つ、エルフの幼女。

『精霊召還師^{テイマー}』の職業を持つレベル371の『アイリス』

それぞれ3人がスケスケのネグリジエを着て俺の傍にやってきた。3人の普段着はこれです、人間の欲望とは酷いものです。

「ご主人様、どのような用件でしょうか」

テレサが嬉しそうに俺に尋ねてくる。

とりあえず、俺は3人を抱きしめた。

きゃ〜と黄色い声上がる。

久しぶりの女だ。

それにそその格好もしているし、味わってからダンジョンに行っても遅くない。

俺は着た装備を脱いで3人を味わうことにした。

スライムで強化された身体で徹底的に味わいつくしてやる。

翌日の昼過ぎに俺と奴隷達は装備を整え、ダンジョンに向かった。

この世界で強さの基準を決めるなら、それは『レベル』によって決まるだろう。

魔物は『マナ』を貯め『レベル』を上げ、人間は魔物を殺し『マナ』を奪い『レベル』を上げる。

これがこの世界での『レベル』の上げ方である。

なぜこのような仕組みになっているのかというと、まず、この世界が太古の神々が『戦争ゲーム』をしたがために作られた世界ということに起因する。

この世界で生まれた人々は神を信仰することにより力を得て戦争していた。

しかし、ゲームで敗れた神が『戦争ゲーム』をうやむやにしてしまったために世界の力を受けて強くなる『魔物』を作った。

ゲームは一時的に混乱したが、それに怒った神が人間に『魔物』を殺せば『魔物』の『マナ』を吸収できる器官を着けた。

また、『マナ』は地中から噴出しているものより『魔物』が蓄え熟成させた物の方がエネルギー価値が高いことがわかった。

それにより、魔物は人間に駆られるようになり。

その魔物をどのくらい殺したのか基準が作られた、その基準が『レベル』である。

そして、戦争が激化すると神は人間を鍛えるために『魔物』が無限に出現する鍛錬場『ダンジョン』を創った。

『ダンジョン』は最下層に到達すると『ダンジョン』を創った神の恩恵を受けることが出来、それは武器、防具、道具として人間に与えられた。

そして、俺が潜っているダンジョン、『エルデンダンジョン』は『創造神』の創りし難攻不落のダンジョン。

現在の最高攻略下層は500層で、50層ごとに『ゲートキーパー門番』と呼ば

れる首領魔物が設置されており、それを下さないと下の層へ行けないのだ。

今は冒険者達のメッカになっており、日々何万人もの冒険者がダンジョンを潜っている。

そのダンジョンの151層。

俺はダンジョンの魔物を木っ端微塵に切り裂いていた。

腰にぶら下げた剣は使いません。

使うのは腕から突き出た紅い剣、『ブラッドスライム・キマイラ』の身体を一部だけ出して使用しているのだ。

ちなみにウォルフのレベルは26だが、スライムの俺のレベルは2500、そして、この階層の魔物の平均レベルは300楽勝過ぎて片腹痛いです。

俺を守る気まんまんだった3人娘はぼか〜ん状態です。

とりあえず、巴に索敵を任せ、アイリスに下へ下る階層探しを任せ、俺は出会う敵を一撃の元に葬り去り、テレサに二人の護衛＋アイテム回収をさせていた。

そんなテレサは微妙にしょんぼりしていた。

そんなこんなでやって来ました200層。

『ゲートキーパー門番』は黒い鋼で出来た『ブラックアイアン・ゴーレム黒鉄巨兵』

このダンジョン『創造神』が創っただけあって、『ゲートキーパー門番』は皆ゴーレムらしいです。

とりあえず、実験の意味もこめ、ゴーレムとは一騎打ちをしてい

ます。

ゴーレムが拳を大きく振り上げ、叩き潰してくるのを俺は両手を突き出し受け止めます。

あたりにまるでビルが崩れたよな轟音が響くが、俺は踏みしめた地面が陥没しただけで無傷だった。

強い、スライムに肉体改造された身体強い。

丈夫さも折り紙つきです。

お返しとばかりに、俺はスライムの紅い剣で斬りつける。

しかし、黒鉄の身体に弾かれる。

更に、剣を槌に換え殴りつけるが、これも弾かれる。

こいつ物理攻撃が効かないのか。

次は迫ってきたゴーレムの拳を避けて距離を取る。

さて、困った。

物理攻撃以外の攻撃手段を俺は持ち合わせていない。

魔法も使えるが基本的にはサポート魔法しか使えないし、攻撃魔法もあるにはあるが、詠唱が長くてとても唱えてられない。

なら、防御力を削るまで。

究極変質『(アルティメルト)』で紅い槌を別のスライムに変換する。

『アシッドスライム』

特性『溶解』アシッドを持つ強い酸を持ったスライムである。

そのスライムを『分離』して投げ飛ばす。
その数10体。

スライムに体中を這われ、身体がどんどん融けていくゴーレム。

俺は『アシッドスライム』を右手に纏って、ゴーレムの胸を殴り飛ばす。

ジュワっという音がして、胸部に青白い核が見える。

俺はそれを鷲掴み、ゴーレムの身体から引き抜くと、ゴーレムは瓦礫のように崩れ落ちた。

「はあ、楽しかった!!」

俺はゴーレムを倒して一息ついた。

『分裂』したスライムは『合体』で回収する。

「お疲れ様です、ご主人様。
一人で『ブラックアイアン・ゴーレム黒鉄巨兵』を倒してしまうなんて、ご主人様は何者ですか」

テレサが話しかけてきた。

だが、俺はその質問に答えるつもりは無い。

「知っているだろ、お前達の主人だよ。

他の何でもない」

そう言って、キスしてやるとテレサは、はいつと呟いて口を噤んだ。

「巴、アイリス。
周囲に人の気配は無いか？」

「はっ、はい、私の耳では周囲に人の気配は感じません」
「アイリスの風精霊さんも居ないって言ってます」

「OKだ、それじゃあ始めよう」

さて、初魔法がいきなりこれとはちょっと心配だが、俺は呪文を唱える。

「開け、虚数の門よ。」

空間を繋げ、その歩みの歩数をゼロにせよ。

『空間魔法・ゲート』

『空間魔法』

これも俺がGPを使い習得したものだ。

『空間魔法の完全習得』に2000、000GPを使用した。

門から出たのは懐かしい顔だった。

黒髪黒目で中肉中背、特徴は無いがよく慣れ親しんだ顔。

生前の俺の顔だ。

しかも、一番よく着ていた仕事着の黒のスーツを着ている。

さて、とりあえず。

このダンジョンは征服しますか。

60兆の『アルティメットスライム』

Side 本体

『アルティメットスライム・インフィニティゴッド』の複数ある特性の1つ『無限増殖』インフィニティで増殖したスライムに1つの優位条件が含まれる。

本来スライムは、固体を増やすために『分裂』を行なうが、その際同格のスライムに『分裂するならレベルを半分にする必要がある。つまり、レベル100のスライムが『分裂』したらレベル50のスライムが2体出来るという法則である。

しかし、『無限増殖』インフィニティで増えたスライムはその法則に当てはまらない。

レベル2500の『アルティメットスライム・インフィニティゴッド』はいくら分裂しても増えるスライムのレベルは2500である。

しかし、一応欠点もある。

『無限増殖』インフィニティで増えることの出来る固体の最高クラスは『アルティメットスライム』までである。

インフィニティの位もゴッドの位も増えることは出来ないのである。

まあそれはさて置き、『エルデンダンジョン』を征服するにはより強い固体を送り込む必要がある。

しかし、この身は既に究極。
これ以上レベルも上がらない、ならどうするか。

より強い固体を作る。

そのためのGPで習得した『スライム作成術完全習得』である。
20,000GPを使用しました。

扱う理論は、『人間は60兆の細胞で形成されている』
これである。

さて、これから『アルティメットスライム』60兆体で、人形スライムを作ります。

使用する特性は『無限増殖』インフィニティエット 『合体』 『変身』の三つだけです。
それではレッツトライ。

そんなこんなで60兆の『アルティメットスライム』で創られた
俺型のスライム、名称『60兆の1体』アルティメット・ワンは現在『エルデンダンジョン』の381階層でモンスターを虐殺中です。

更に下って400層。

首領の『ダイヤモンド・ゴーレム結晶巨兵』を一発で砕き。

『ダイヤモンド・ゴーレム空間魔法・バックヤード』に『ダイヤモンド・ゴーレム結晶巨兵』の破片と核を回収し、
更に進行を開始。

450層で『クリムゾンダイヤ・ゴーレム紅結晶巨兵』を撃破し。

500層で『クリスタルサファイヤ・ゴーレム蒼結晶巨兵』を撃破し。

550層で『レインボークリスタル・ゴレム虹結晶巨兵』を撃破し。

（省略）

800層で『神造兵・一騎当千』をこり押しで撃破し。

850層で『神造兵・混沌』を自身も60兆のスライムに分裂することで撃破。

900層で『神造兵・滅鬼』に一撃で20兆のスライムが破壊されるもスライム同士の相互作用で一体でも万全なスライムが居れば即復元の効果を持つ『不滅』によりどうにか押し切る。

950層で『神造兵・創造神の軍勢』による100万の大打進にも何とか耐え切り。

そして、1000層。

俺は終着地点にたどり着き。

ばあ〜ん！！

クラッカーの音で出迎えられた。

そして、ぱちぱちぱちぱちと拍手をされる。

一体のメイドに。

今までの感じからして、こいつも『神造兵』なんだろうけど、すごく友好的です。

なんか、見た目も今までと違ってかなり可愛いです。

白銀のダイヤモンドの様な髪に黄金の瞳、そして服装は白と黒を基調にしたメイド服。

でも、このメイド服、インナーがどう見ても身体にフィットした黒色のレオタードで、ぶつちやけ、すく水メイドに見える。

創造神。

お前は天才かそれとも変態か？

「おめでとつございます。」

創造されて5000年、貴方様が『エルデンダンジョン』初攻略者です」

「はあ、ありがとうございます」

「攻略者には『創造神』より、恩恵の品が送られます」

《『創造神』より『アルティメットスライム・インフィニティゴッド』へ『神造兵・冥土』が送られます》

「……この『神造兵・冥土』って君のこと？」

「はい、私のことです」

「君って、何が出来るの？」

「何でも出来ます。」

掃除、洗濯、お裁縫、料理、工事、手術、武術、剣術、槍術、暗殺技術、錬金術、魔術。

さらに『創造神』より、『神造兵の作成技術』も教わっておりますので『神造兵』も作れます」

「……思いのほか有能だった。」

「えびに……」

「……えびに？」

「ちよーっ、きゅーとです」

「……超キユート？」

「めがっさかわいいです」
「めがっさ」

「じっじほっしもできます」
「……………採用決定」

「ありがとうございます。」

これから一生懸命尽しますのでよろしくお願いします」
「OK、よろしく。」

……………でも」

「でも？」

「君の裏切りは怖いから『ソウル・コントラクト魂縛魔法』はかけさせて貰う」

「はい、じっじ自由にどうぞ」

そう言って、メイドの人形は綺麗に笑い。
俺の配下に加わった。

人間（中身はスライム）の『ギルド戦争』

Side ウォルフ

どうも、ウォルフです。

『60兆の1体』アルティメット・ワンを六畳一間から呼び出した後、『空間魔法・バツクヤード』ブラックアイアン・ゴレムを使って『黒鉄巨兵』の残骸と核をしまい、俺と奴隷達はダンジョンを後にしました。

その後、奴隷達にいろいろ質問されたけど、答えるのがめんどくさかったのだ。

奴隷は主人の要求にだけ答える、いちいち俺に質問するなど、言ったら3人ともシユンとしてしまいました。

とりあえず、ベッドの上で機嫌を取って置きました。

さて、バトルロワイヤルでの戦略面で俺に与えられた役割について考えてみよう。

俺の役割は囷である。

この世界で最も賑やかな町『エルデン』でオリシユも真つ青な痛い行動を行い、目立ちまくり、『転生者』に発見されるのが俺の役割である。

そして俺を見つけた『転生者』が俺に接触したり攻撃を加えることにより、相手の能力を測り、本体が送り出した殲滅班が敵『転生者』を撃破するという戦略である。

だから、俺がすることは目立つことである。
目立つこと………とりあえず、戦争でもするか。

この世界『エネルギー』では、今現在3つの国が覇権を競い合っている。

まず、3国中最も広い国土を持つ『ヘリオートル』

太古に『戦闘神』を崇拜していた国。

兵は皆武芸に厚く、国家規模で毎年武術大会が行なわれている。
国力を数値で記すなら7ぐらい。

次に2番目に国土の広い『バルバット』

太古に『極光神』を崇拜していた国。

国民の宗教的な繋がりが強く、町の至る所に祈りを捧げる神殿がある。

国力は5ぐらい

最後に3番目に国土の広い『グリユーネゲル』

太古に『深緑神』を崇拜していた国。

首都に『世界樹』が生えており、最も魔術と医術の進歩している国。

国力は4ぐらい

さて、それでは『エンデル』はこの国に属しているのかというと、全ての国に所属している町である。

過去にこの『エンデル』を取り合って3国は血みどろの大戦争を繰り返した。

その結果、3国は『エンデル』を3分割し、『エンデルダンジョン』を3国共有の物にすることを決意したのである。

ちなみに3国間の親密度は

『ヘリオトール』 嫌い 『バルバット』 同盟関係 『グリユーネゲル』

『グリユーネゲル』 嫌い 『ヘリオトール』
って感じで、『バルバット』と『グリユーネゲル』が協力してるから『ヘリオトール』が世界征服を出来ないという感じである。

ちなみに俺の家ゲツペルド家は『グリユーネゲル』の領地に所属しており、税金も『グリユーネゲル』に収め、家の守りも『グリユーネゲル』の兵にお願いしている。

奴隷関係のお付き合いで『グリユーネゲル』の王家との繋がりもある。

そして『バルバット』との繋がりもある、奴隷関係で。

それじゃあ、『エンデル』で問題を起こす場合はどの国に所属している地域がいいだろうか、当然『ヘリオトール』1択である。

「ギルド戦争だあ〜」

「はい、戦争を仕掛けに参りました」

俺は戦争をすることを決めた次の日に中央ギルドで登録をして、ギルド『ブレイクファースト』を立ち上げ、『ヘリオトール』に所属している最も力あるギルド『オブリビア』に宣戦布告した。

「おいおい、ここを何所のギルドだと思ってるんだ、『エルデン』」

最強のギルド『オブリア』だぞ、冗談なら他所でやってくれや」

「冗談でもなく本気です。

ギルド長への面会をお願いします、戦争宣言するんで」

「アホか、自分死にたいんか？

なら、俺が殺したるわ」

「ふむ、どう合っても通さないと」

「あたりまえや」

「OK、じゃあ、貴方の首を手土産にして通ることにします」

門番が抜刀するその前に、俺は門番の首を斬り飛ばした。

『エルデン』では協定により国同士の争いは禁じられているが、ギルド同士の争いは禁じられていない。

だが、ギルドの所有している敷地面積が、そのまま国が『エルデン』を管理できる範囲であり、ギルドのバックに居るのは国である。だから、ギルドが強ければ『エルデン』の土地を多く所有できる。むしろギルドの力こそ、国の力の縮尺なのだ。

強いギルドを持つ国こそ強く、弱いギルドの国こそ弱い。

そして、その強さを決めるのが『ギルド戦争』である。明確なルールに乗っ取る殺し合い。

それによる『エルデン』の陣取り合戦。

それが『ギルド戦争』である。

「ちわく『ブレイクファースト』です。
ギルド戦争しに来ましたあ」

結局ギルド長に出会うまでに30人の首を切り飛ばし、ようやく
面通りがなかった。

俺の正面には顎鬚を生やした強面の男が一人と護衛が数人。
ぱつと見、相手の実力はかなり高いように見える。

「貴様が家の団員を斬り飛ばしている狂人が
死ぬ覚悟はできているか？」

「いや、前書きはいいからギルド戦争しません？」

宣言が無いと貴方を殺しても意味が無いんですよ、困ったことに
「いいだろう、ギルド長『アルゴス・アンディーク』の名において
『ブレイクファースト』とのギルド戦争を認証する」

「OKです。」

ギルド長『ウォルフ・ゲッペルト』の名において『オブリビア』
へのギルド戦争を仕掛けました。

「じゃあ、賭けるのはお互いのギルドの全てでいいですか」

「依存はない。」

「貴様にギルドを差し出すことはないのだから」

「OKです。」

「じゃあ、戦争をしましょうルールはそちらが決めてください」

「戦争協定の第三条の三項による。
精鋭団員100人による『全面戦争』を進言する」

「了承です。」

「こっちは1人しか居ないんで、そっちは直ぐに100人選んでください。」

「今すぐ始めたいでしょう?」

「もちろんだ。」

「直ぐにその息の根を止めてやる」

「嬉しい返事をありがとうございます。」

「場所は、貴方達の訓練所がいいですよ、どうせ施設内に在るんでしょう」

「当然だ」

「じゃあ、その人案内してください。」

「俺はそこで待っているんで、」

「開始時間は一時間後でいいですか?」

「30分後だ」

「OKです」

「ふむ、団員が殺されたことでギルド長は頭に血が昇っているだろう。」

「とんとん拍子で戦争の開始が決まった。」

30分ほど、グランドのような場所で待っているところどころと千人近い人間が集まってきた。

「待たせたな」

「はい、お待ちしてました」

1000人の鎧を着込んだ戦士達と共に漆黒のフルプレートメイルを着込んだアルゴスがそこに居た。

「最後に聞こう、なぜ、我がギルドへ戦争を仕掛けた」

「うーん、そうだな。」

親友を『オブリビア』に殺されたからとかどうだろ？」

「なに!？」

「あと、妹を『オブリビア』に攫われたからとかでも、婚約者が攫われたの方が燃えますかね？」

「もういい、わかった。」

「貴様を殺す」

「OKですよ」

「さっさと始めましょう」

《世界『エネルギー』の名において、ギルド戦争を開始する》

『虐殺殲滅の』武芸百般』

（Side 本体）

なんとこの事でしょう。

匠の圧倒的な手腕により、六畳一間だった拠点が合計50室の部屋がある豪邸へ変化しました。

ちなみにトレーニングスペースの均された地面のグラウンドがある。

いや、確かに狭かったし。

俺自身もそろそろ拡張に乗りだそうと思っていました。

ここまで広く立派になるとは、メイドさん恐るべし。

「ご主人様、空間の拡張と居住スペースの作成が終わりました」

そう言って、俺の目の前に現れたメイドの手には、主導で回るドリルがあった。

まさか、まさかそれ一つでこれを作ったんか？

さすが『創造神』の造りし『神造兵・冥土』他の『神造兵』とは一味も二味も違っぜ。

「ありがとう、メイド。」

お前は配下に加えられたのは幸運の極みだ」

「感謝の極み」

「さて、とりあえずダンジョンで収集した素材の整理をするからお

「前も手伝ってくれ」

「はい、承知しました」

グラウンドに収集したアイテムを全て並べる。

「とりあえず、『武芸百般の神核』は吸収しようと思うんだよね。

俺、武術の才能ないし」

「それはいいお考えです。

ご主人様と『神造兵・一騎当千』と戦いは見ていましたが、圧倒的に技術で劣っているご主人様がひらひらあしらわれている様はとてもガツカリしました。

その後『時間魔術』で敵の速度を落とし、更に自分の速度を上げようやく勝っていましたね。

しかも、詠唱を何度も中断させられて、5体に分裂してようやく詠唱していましたし」

「お前、何なの俺のこと嫌いなの？

『ソウル・コントラクト
魂縛魔法』したこと怒ってるの？」

「いえ、私は客観的な事実を述べているだけです。

だから、ご主人様が『武芸百般の神核』を吸収することは大変よい考えだと思います」

「OK、わかったよ。

それじゃあ吸収しますか」

名が斬り飛ばされる。

「だつ団長、自分は夢でも見ているのですか？」

あの男、『解析魔法』ではレベル26の筈なのに、何故、我らが精鋭たちが平均レベル

400の猛者たちがああも無残に切り飛ばされているのですか？」

「ぬかった、ぬかったわ。

あの男本当に我々を滅ぼす積もりだ。

本当に我々と戦争をしにきたのだ」

更にハルバートで薙ぎ払う。

1 凧、2 凧、3 凧、4 凧5 凧6 凧7 / 8 / 9 / 10 凧。

70人近い人間を薙ぎ払い。

そのままハルバートをアルゴルの隣の男に投擲する。

男は頭部に刃を受け、絶命した。

落ちているナックルガード付きのバスターソードを拾い、アルゴルへ刃を向ける。

「さて、大将。

残るはあんた一人だ。

一本真剣勝負を頼むよ」

（Side アルゴル）

我は左右の剣を抜いた。

右手には攻めの太刀を上段に構え、

左手には守りの小太刀を正眼に構える。

いつもの構え、いつもの攻防。
小太刀で攻撃をいなし、太刀にて屠る。
攻防一体の構え。

しかし、何故だ。

刺突の構えを取る、やつは攻撃を捌くの簡単だ。

錬度が高く、無駄の無い攻撃故に読みやすい。

我程の戦闘経験を積みればその程度は容易いし、何より奴は我に攻撃を見せずだ。

いくら優れた攻撃でも、筋を読めば勝てぬ道理など無い。

しかし、まったく、生き残れる気がしない。

ヒュンと矢が過ぎ去るような音がして、我は放たれた刺突を小太刀で弾き、必殺の太刀を奴の脳天めがけ振り落とした。

斬！！

と音が響き、振り下ろした太刀は脳天への直撃を避けられ、奴の肩を深く切り裂いた。

しかし、身体は両断できず、刃は胴体の中ほどで止まっている。
だが、これで致命傷。

我の勝ちだ。

「いや、さすがギルド長、雑魚とは違うね。

一太刀貰っちゃうとはびっくりだよ」

瞬時に太刀を引き抜こうとした瞬間、右手を万力の様な握力で掴まれる。

「しまった」

「に〜が〜さ〜な〜い」

天高く振り上げられた剣を見て、我は意識を失った。

〜Side ウォルフ〜

バスターソードを振り下ろし、頭を兜ごと切り裂いき、俺は大将首を討ち取った。

以外に呆気ないものだ。

最強ギルドのギルド長と言っても所詮人間か、たいしたことは無いな。

俺はアルゴルの首切り取って、中央ギルドへ向かうことにした。早く申請をして、『オブリビア』の所持している『エルデン』の一等地を回収せねば。

俺は呆然と崩れ落ちた団員たちを横切って中央ギルドへ急いだ。

中央ギルドは『創造神』建てた建物で、『エルデン』の行政を請け負っており、町や『ダンジョン』、そして、『ギルド戦争』を管理している。

ちなみに中央ギルドで働いているのは『創造神』が造った『神造兵』達で、業務内容は正確誠実がモットーである。

アルゴルの首を受けついで渡して、今日の10時過ぎに言われたであるつアルゴルの『戦争宣言』のデータを呼び出してもらつ。

そう、この『エルデン』での出来事は全て中央ギルドで管理記憶されている。

しかし、どんな犯罪が起ころうと、この『神造兵』達は『戦争宣言』以外の記録は提示しない、そういう決まりになっている。

管理記録にアクセスしてもらったときちゃんとアルゴルの『戦争宣言』は記録されていた。

これにより『オブリビア』の全部の所持品、全ての財産が『ブレイクファースト』に没収されることになる。

回収のため中央ギルドの『神造兵』達が動き出した。

これで『オブリビア』のメンバーは逃げも隠れも出来ないだろう。

とりあえず、全員『魂縛魔法』ソウル・コントロールで奴隷にしましょうか。

『ウルクス霊山』の龍

（Side 本体）

俺は今メイドに『魔道書作成術』を習っています。

ちなみに今更だけど、俺が習得している技術は以下の5つしか在りません。

- 『スライム作成術完全習得』
- 『錬金術完全習得』
- 『使い魔作成術完全習得』
- 『空間魔法完全習得』
- 『時間魔法完全習得』

ちなみに錬金術と使い魔作成術はスライム作成術の補助技術として必要だったので習得しました。

全部で使用したGPは460,000GPです。

俺が使用したGPは『マナプール』の作成とこの5つの技術の習得にほぼ全て使用しました。

……戦闘系スキルなどいらななのです。

引きこもって刺客を送り向けて勝利する、これが俺の戦略です。

ただ最近、囧がちよつと強すぎるような気がしてきました。

まあ楽しいからいいんですけどね。

囧であるウォルフも俺だし、本体も俺で、意思が共有されているので、ウォルフが楽しいと俺も楽しいし。

《『魔道書作成術初級習得』を獲得しました》

「おっし、覚えたか。」

「これで俺の夢がまた少し広がったな。」

「ご主人様の夢？」

「世界中の美女を侍らせる夢ですか。」

「いや、この世の娯楽、悦楽、享楽を思う存分貪りつくすこと。」

「さすが、ご主人様です。」

「その際は、私に『ヘリオートル』にある『神像』を破壊させてください。」

「えっと、『神像』って国教の象徴だっけ？」

「なに、メイドって『戦闘神』嫌いなの？」

「はい、『創造神』は『戦闘神』との戦争に負けて領土をほぼ奪われましたので。」

「粉々に砕いたあと、『創造神』の像に作り変えます。」

「まあ、そのくらいならいいよ。」

「その分、俺に尽せよ。」

「頼りにしているんだから。」

「了解です。」

「というか、さっきも『魔道書作成術』教えましたし、それに命令された通りに700階層で倒した『神鉄巨兵』オリハルコン・ゴレムの破片で造ってききましたよハルバート。」

「命名『チャッピー』とか、どうでしょうか？」

「いや、ハルバートに『チャッピー』って名前はどうかと思つよ。
というか、武器に名前はいらんだろ」

「いえいえ、『オリハルコン神鉄』『ミスリル聖銀』『魔鋼（アドマンタイン）』で造られた武器なら道具としての格も高いので、名前をつけておけば『武器精霊』が宿るかもしれません。」

精霊核が宿り、武器としてより強力になる可能性もあります」

「OK、名前は重要なのね。」

そつか、じゃあ、まあいつか『チャッピー』で」

「……………えっと、いいのですか？」

「お前をメイドと呼んでいる時点で、俺のネーミングセンスは酷いからな。」

お前のセンスに任せることにする」

「……………了解しました。」

今更出すけど、私の正式名称は『リーラ』です」

「本当に今更だな。」

それと俺の名前は『カズキ』だ。」

前世名というか、『真名』は伏せるぞ」

「了解しました、ご主人様」

「OKだ。」

こつちこそよろしく頼むぞ、メイド」

「はい、かしこまりました。
そういえば、このハルバート『チャッピー』は誰が使うんですか？」

「ああ、それはウォルフ用。

俺は戦わないし、『60兆の1体』アルティメット・ワゴンは素手の方が強い」

「そうですね。

『60兆の1体』アルティメット・ワゴンは正直、異常だと思えます。

特に耐久性の面で見ると、神にも通用すると思えます。

攻撃面はしょっぱいですけど」

「しょっぱい、言うな。

それと『60兆の1体』アルティメット・ワゴンがようやく第2目標地点のダンジョンに到達したわ」

「『ウルクス・ダンジョン』ですね。

『ウルクス霊山』の中腹にある『氷夜神』が造ったダンジョン、
『氷』と『闇』の二重属性の珍しい神でダンジョンの最深部は極寒の暗闇で人間は入るところか近づく事さえ無理と言われております」

「うん、知っている。

でも『スノースライム』なら特性『凍結無効』を持っているし、『ブラックスライム』も特性『暗黒無効』がある。

心配には値しないさ、それに貯蔵品にも興味がある」

「『深緑神』の寵愛花『青い薔薇』ミス・トレイアですね。

『氷夜神』が『深緑神』から奪いし奇跡の薔薇、その輝きは見るとの全てを魅了すると言われております」

「うん、だから見てみたい」

「『魅了』されるかも知れませんか」

「俺に状態異常は効かない。」

『アルティメットスライム・インフィニティゴッド』は伊達じゃない。

『ゴッド』の特性である『超常』は異常状態を無効化し、全ての属性攻撃を無効化し、全てのダメージを半減する。

これって、酷い効果だよな」

「そうですね。」

でも、『60兆の1体』アルティメット・ワンはどうなんですか」

「ああ、『ピンクスライム・リリム』になれば『魅了』は効かない。問題ないさ。」

それに花なら、錬金素材やスライムの素材にもし易いし」

「了解です」

そんなこんなで『60兆の1体』アルティメット・ワンのダンジョン攻略第2段始まるよ

Side 『60兆の1体』アルティメット・ワン

『60兆の1体』アルティメット・ワンです。

今現在『ウルクスダンジョン』の2階層でモンスターを殲滅中です。

基本『アイスエレメント』や『スノーウィスプ』、『アイスゴレム』に『スノースライム』しかないのでこっちも『スノースライム・フローズン』に変質して『凍結無効』『氷属性無効』をつけて殴り飛ばしています。

ダメージなんて微塵も受けません。
地形ダメージなんて逆に回復します。

そんなこんなで第100層、『ゲートキーパー門番』は『氷精霊・小雪』ぶつちやけ見た目は雪女。

ワンパンで沈めました。

『氷精霊の核』を手に入れた。

続きまして第200層、このダンジョンの『ゲートキーパー門番』は100層ごとのようです。

立ちはだかるのは『闇精霊・暗行』

『暗闇』や『暗黒』などの視覚封鎖系の攻撃はいらいたけど『ブラックスライム・ダークネス』に変質したら余裕のよっちゃんでした。

『闇精霊の核』を手に入れました。

更に続いて300層。

出て来たのは『氷夜精霊・雪夜』

身体を『スノースライム』頭を『ブラックスライム』にして完封勝利。

『氷夜精霊の核』を手に入れました。

そろそろ終わって欲しい第400層。

現れたのは『氷夜龍・ウルクス』。今までの奴とは強さの桁が違う。『氷』と『闇』の属性を込めた龍のプレスに身体の半分を吹き飛ばされが『不滅』で即回復。

変質で『シルバースライム・ルーク』になり、特性『高位対魔力』でプレスによるダメージを減少させるが、それでも受けるたび10兆のスライムが殺される。

こっちも殴るが、鱗がダメージを吸収して威力が減少させられる。そうして、殴るプレスのイタチごっこが開始され4時間。

しまいに噛み付かれた俺は、そのまま龍の体内に侵入して内部から攻撃。

『氷夜龍・ウルクス』を撃破しました。

『氷夜龍・ウルクス』の爪に牙、骨に鱗、目玉に心臓といろいろな素材を手に入れ、中核である、『氷夜龍の龍核』を手に入れた。

うめえ、龍殺しはうめえ、錬金素材が凄いいことになる。

さて、それではメインディッシュを拝見しますか。

龍を倒したことにより、次の層への扉が開く、そこから階段を下っていく。

とりあえず、防御のためにスライムを『ピンクスライム・リリム』に変質させる。

そして、嚴重に閉ざされた扉を俺は開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8149z/>

とりあえず、異世界でバトルロワイヤルします

2012年1月1日23時49分発行